Cure to Care　第９話

與儀　達朗

【登場人物】第9話（最終話）

町田　翼（32）…救急・訪問診療医

鈴木　舞（32）（18）…訪問看護師

村井　正和（50）…訪問診療所院長

五十嵐　隼人（28）…訪問診療所アシスタント

金城　恵（36）…訪問診療所アシスタント

山崎　香織（55）…居宅ケアマネージャー

鈴木　健（52）…外科部長、鈴木舞の父

八木　直久（50）…救命センター部長

我那覇　さくら（28）…有料老人ホーム花の看護師

石原　翔（37）（23）…外科医

新井　亮（29）…町田の後輩の救急医

高井　玲奈（30）…救命センター看護師

鈴木　真由（50）（36）…鈴木舞の母

那須　輝武（65）…謎の男

那須　弓子（60）…那須の妻

木村　フミ（90）：施設患者

岡田　三郎（80）：在宅患者

岡田　明子（50）：岡田の娘

島崎（30）：町田の後輩の救急医

山田（29）：町田の後輩の救急医

光浦（35）：集中治療室看護師

原口（50）：外科副部長

亀井（45）：外科医長

長尾（40）：外科医

橘（32）：外科医

鳥越（48）：救命センター副部長

青山（40）：ケアマネ

親川（58）：有料老人ホーム花施設長

安武（70）：居宅患者

医師A（26）：救命救急センター研修医

看護師A（24）：救命救急センター看護師

患者A（55）：救急外来患者

患者B（70）：救急搬送患者

患者C（60）：救急搬送患者

患者D（75）：救急搬送患者

患者E（80）：外来患者

救急隊員A（28）：救急隊員

救急隊員B（28）：救急隊員

【あらすじ】（第９話）（最終話）

急変した木村の治療方針を那須に伝える町田だが、那須は町田に、主治医としての本当の考えを求める。一方で、入院中の鈴木の容体は悪化の一途を辿るが、状態の安定化を望む石原は、集中治療管理に関して救急科に応援を要請する。那須との対話でヒントを得た町田は『患者の人生で医療を決める』ため、仲間の協力も得ながら、合同カンファレンスにて、再び石原と相見えるのだった。

第９話　（最終話）「Cure to Care」

○有料老人ホーム花・個室（夜）

町田翼（３２）が驚いた表情で、那須輝武（６５）の姿を見ている。我那覇さくら（２８）が、救急車を呼ぶために、那須に一礼して部屋の外へ出ていく。

町田「那須理事長……なんでここに？」

那須「僕の義理の母なんだ」

町田が、腑に落ちた表情をしている。

扉の前に那須弓子（６０）が姿を見せる。弓子は町田に一礼して、苦しそうな表情の木村フミ（９０）のそばに来て、腰をさすっている。

弓子「お母さん」

町田の方を振り返る弓子。

弓子「町田先生、母の具合は？」

町田のそばに来る那須。

那須「解離だって？」

町田「はい、おそらく」

町田「フミさん、何度もごめんなさいね」

左側臥位で寝ている木村フミ（９０）の胸に再度エコーをあてて、心臓を描出する町田。那須は十秒ほどエコーの画面を見ている。

那須「確かに先生の言うとおりかもね……」

那須は弓子の方を振り返る。

那須「詳しくは病院で検査してみないとわからないけど、おそらく大きな血管が裂けている可能性が高い」

弓子「そんな……」

那須が、フミの頭元に『木村フミ　主治医：町田先生』と書かれたネームプレートをちらっと見て、一呼吸置いて、町田の目を見る。

那須「それで、町田先生の考えは？」

町田「持続的な血圧と痛みのコントロールが必要なので、救急搬送を要請しました」

那須「その後は？」

町田「その後ですか？」

町田が少し困惑した表情を浮かべている。

那須「主治医として病院ではどういう治療が、フミさんには望ましいと思っているの？」

町田「それは……」

数秒下を向いて抱えている町田。

町田「おそらく根治術は手術です。手術を受けてもらえれば……」

町田は、寝ているフミの方を向いて、フミの右手を優しく握る。

町田「フミさん。おそらくですが、大きな血管の病気です。治すためには大きな手術を受けてもらう必要があります。リハビリを含めて大変な道のりにはなると思いますが回復の可能性はゼロではありません……」

那須が黙って町田の話を聞いている。

町田の表情は揺らいでいる。

フミが自身の左手を、町田の手に被せて力強く握る。

フミ「町田先生、もう手術はいいよ。痛みさえとってくれたら……」

町田「そんな……どうしてですか？」

フミ「もう十分生きたわ。これ以上は頑張りたくない。欲を言えばこの施設で過ごしていたい……」

痛みを堪えながら、優しい表情で町田、弓子の方を見る。弓子の目に涙が浮かんでいる。外から聞こえる救急車のサイレンの音が徐々に大きくなってくる。

フミ「町田先生？」

何か悩んでいる表情の町田。

那須「フミさんは、先生の本当の考えを聞きたいんじゃない？」

町田が那須の言葉を聞いて、意を決した表情でフミの目を見る。

町田「フミさん、なんとか施設に戻って生活できるように病院にはお願いします。またおやつやレク、楽しみたいですもんね？」

フミが町田の顔を見て頷く。

○救急車・車内（夜）

座席に座って、ストレッチャーに寝ているフミの手を握っている町田。

町田「フミさん、大丈夫ですよ。もうすぐ着きますからね」

酸素マスクを付けているフミが、町田の顔を見て頷く。町田の横に座っている弓子は依然心配そうな表情を浮かべている。

○前田救命センター・初療室（夜）

初療室のドアが開く。救急隊員A（28）、救急隊員B（29）、町田がストレッチャーに乗っているフミを連れてくる。

島崎（30）、高井玲奈（30）が救急隊Aと協力して、初療室のベッドにフミを移し替える。山田（29）が救

急隊Ｂから引き継ぎを受けている。
島崎が町田の方を振り返る。
島崎「指示通りに、フェンタニルの持続点滴を用意しておきました」
苦悶様の表情のフミ。
高井「血圧はありそう。町田先生？」
高井が町田を見る。町田が高井の目を見て頷く。高井がフェンタニルを確保していた静脈路に繋げる。
島崎「ＣＴ室の準備は？」
高井「できている」
高井を見て頷く島崎。

○同・ＣＴ室（夜）
苦悶様の表情が少し落ち着いたフミが、ＣＴ台の上に乗っている。ＣＴの撮影が終わる。ＣＴ室にあるパソコンの画面で画像を見ている島崎、町田、高井の三人。
島崎「先輩の読みどおりですね。心臓外科へ

今後の方針について聞いてきます」

町田「島崎、それは必要はない」

島崎「え？」

島崎は町田の発言に驚いている。

○同・ステーション前（夜）

フミが乗ったストレッチャーを町田と島崎が移動している。フミの表情が和らいでいる。

島崎「先輩、これから病棟に移動しますね」

町田「ありがとう」

島崎「施設に戻すにしても、痛みのコントールが課題ですね……」

町田「そうだな……」

ステーション前から経過ベッドを見渡す町田。山田が中心静脈カテーテルを挿入している。医師Ａ（２６）が、患者Ａ（５５）の腕の縫合をしている。

○同・ステーション（夜）

高井がステーションの机に置いてある電話の受話器を耳にあてている。通話が終わり、受話器を戻す高井。高井が島崎の方を見る。

高井「墜落の患者さん、あと5分で着くって」

島崎「わかった」

町田がシフト表に目をやっている。翌日の新井の勤務が遅出になっていることに気付く。並んでいる町田と島崎の後ろ姿に、男（那須）が声をかける。

那須「島崎先生、今日は忙しそうだね」

後ろを振り返る島崎だが、驚きの表情を浮かべている。

島崎「理事長？」

那須「ちょうどここに寄る用事があってね、手伝うよ」

島崎が那須を見て頭を下げる。

島崎「助かります」

那須が上着を脱ぎながら、町田に声をける。

那須「町田先生、施設に戻す方法、何か考えはあるの？」

町田が那須を見て頷く。

○新井宅・居間（夜）

夜更かしをしている新井亮（２９）は、パソコンの動画サイトでバラエティ番組を観ながら、楽しそうに笑っている。

横に置いてあるスマホに着信が鳴る。

『町田先輩』の表記がされている。

新井「こんな遅い時間にどうしました、先輩？」

町田（声）「新井、すまん。今何している？」

新井「えっ、自宅でダラダラしていますけど……合コンの二次会ですか？」

町田（声）「残念ながらそれはない」

会話の内容に少し期待していた新井の表情が真顔に戻る。

町田（声）「新井、頼みがある」

電話で町田とやりとりをしている新井。

新井「え、勘弁してくださいよ、先輩」

新井が少しうんざりした表情で、壁をの時計を見ている。時計は１１時５０分を指している。

町田（声）「すまんが、新井しかいないんだ、頼む」

新井「わかりました……その代わり、今度訪看と合コン作ってくださいね」

新井は電話を切り、ため息をつくが、覚悟を決めた表情をしている。

○同・集中治療室　面談室

Ｔ「翌日」

面談室には寝不足気味の新井、光浦（３５）、町田、親川（５８）、我那覇、那須、弓子の七人が座っている。

光浦「それでは退院前カンファレンスを始めたいと思います」

新井「フミさんはスタンフォードＡ型急性大動脈解離の診断で、本来であれば手術が必

要ですが……」

新井が横に座っている町田の顔を見る。

町田が新井を見て頷く。

町田「手術による根治の可能性はゼロではありませんが、本人の思いを尊重して、手術はせずに、元の施設への退院を目指す方針としています」

黙って話を聞いていた那須が、町田、新井の顔を見る。

那須「施設での痛みの管理はどう考えているの？」

町田が横に座っている新井の顔を見る。

新井が町田を見て頷く。新井がポケットから湿布薬を取り出す。湿布にはフェントステープと書かれている。

新井「今、フミさんの体には麻薬の痛み止めが持続的に流れていますが、同じ成分を含んでいるこの湿布で痛みをコントロールできると考えています」

町田「フミさんは施設での生活が生きがいな

ので、湿布であれば負担が少ないかと……」

那須が町田と新井を見て、感心した表情を浮かべている。

弓子「母に残された時間って、どのくらいですか？」

新井「さっき心臓外科の先生にも聞いてみましたが、正直専門の先生でも読めないそうです」

町田「逆に考えると、残された時間がわからないからこそ、なるべく早く施設へ調整してあげた方が良いかもしれません」

我那覇「施設で気を付けることとか、何かありますか？」

親川「あとは急変時の方針とか……」

町田「はい――」

退院前カンファレンスが続いていて、参加者がやりとりを続けている。

○同・集中治療室　面談室

退院前カンファレンスが終わり、面談

室から親川、我那覇、弓子が出てくる。
扉の前に立っている光浦が三人を集中治療室の入り口に案内する。遅れて出てくる町田と新井。面談室内では
那須が誰かと電話をしており、電子カルテで鈴木健の多職種カンファレンスの記録を読んでいる。

○同・集中治療室前　廊下

町田「新井、助かったよ」

新井「先輩、講習二時間で終わるって言っていたのに、倍かかりましたよ、倍！」

町田が新井の左肩を優しく叩く。

町田「新井のおかげで、フミさんは施設に戻れる、本当ありがとう」

新井「ちゃんと約束守ってくださいよ」

町田「約束？」

新井「えー先輩、頼みますよ、合コーー」

新井の院内ピッチが鳴って、電話に出る新井。口パクで「合コン」と町田に

言って去っていく。

那須「町田先生」

那須が面談室から出てきて廊下に立っている。

那須「ちょっと時間あるか？」

町田「ええ……何か？」

那須「ここではちょっとね」

不思議そうな表情で那須を見ている町田。

（回想はじめ　一時間前）○医局・小会議室

外科のカンファレンスが行われている。

原口（５０）、亀井（４５）、長尾（４０）、橘（３２）が椅子に座っている。電子カルテを操作している石原翔（３７）。白い壁にはプロジェクターで、鈴木健の電子カルテが投影されている。

石原「鈴木部長は、化学療法中となっていますが、腫瘍の影響と思われる胸腹水の体液

コントロール、栄養管理に難渋しています」

石原「ですが、主治医として、わずかな可能性に賭けたいと思っています」

石原が原口を見る。

原口「石原、なんか策はあるのか？」

石原「はい、僕は集中治療室に入室して、管理のために救急科に管理を依頼するべきだと思っています」

長尾が、ため息をついて石原を見る。

長尾「石原、お前自分の言っていることがわかっているのか？」

石原「どういう意味ですか？」

亀井「この状態、俺は限界だと思うけど……。部長が集中治療に耐えられると思っているの？」

石原が長尾と亀井を見る。

石原「お言葉ですが、長尾医長、亀井先生。お二人が部長の主治医でも、同じことを言えますか？」

長尾と亀井が、黙って石原の話を聞い

ている。

石原「お手元の資料を見てください。部長の今の状態でも、回復したケースが世の中にはあるのです」

原口、長尾、亀井が提供された資料を見ている。

原口「部長はなんて言っているの？」

石原「外科の方針に任せると」

自信をのぞかせる石原。

○前田救命センター・部長室

八木が椅子に座って、机の上のパソコンで、鈴木のカルテを見ている。

机を挟んで立っている原口。

八木「うちに集中治療室での管理のため、併診をお願いしたいって？」

原口「主治医の石原の思い、彼が示してきたデータを総合的に考えた結果だ……」

八木が数秒ほど下を向いて考えている。

顔をあげて原口を見る八木。

八木「原口も俺も部下を考えている。これは俺たちだけの問題じゃない」

八木「この件については、外科と救急集中治療科での合同カンファレンスを開きたい」

八木の机に置いていた院内ピッチに着信が鳴り、電話に出る八木。

八木「もしもし八木です。――はいわかりました、ありがとうございます」

電話を終える八木。

八木「合同カンファレンスについては理事長も納得されている」

八木と原口がお互いの目を見ている。

（回想終わり）

○同・屋上

町田と那須がベンチに横並びで座っている。

町田「理事長、話ってなんですか？」

那須「僕もこの病院に勤めて長いけど、内科外科と救急科の間で根強く残っている問題

がある。何だと思う？」

町田「根強い問題ですか？」

下を向いて数秒ほど考えている町田。

那須「治療コードだよ」

町田「確かにそうですね……」

苦い表情を浮かべる町田。

那須「ガンを患った患者と長年付き合い、治療してきた医者からすると僅かな可能性でも賭けたい」

那須「対して、急変後の窓口になる医者にとっては、自身の処置が延命につながるかもしれないから、予め治療方針を決めておいてほしい。なるべくなら侵襲的なことをしない方向で……」

那須「僕の専門は外科と救急だから、どちらの考えも大体わかる」

町田「結局、一筋縄ではいかない……そういうことですよね？」

下を向いていた町田がため息をついて。

那須の顔を見る。那須が頷く。

那須「鈴木先生の多職種カンファレンスの記事を読んだよ」

町田「すいません、部外者なのに……」

申し訳なさそうな表情で下を向く町田。

那須「僕が言いたいのは、そこじゃない」

那須は優しく町田の肩を叩き、ベンチから立ち上がって十秒ほど景色を見ている。那須が町田の方を振り返る。

那須「石原先生、本当すごいよな。米国帰りの知識と技術。あの若さで、難しいオペもバンバンこなして患者を救っている」

町田「大学の時のサークルの先輩なんですけど、本当すごいですよね……」

那須「でも……今の彼には足りないところがある。それを町田先生は知っている」

町田「どういう意味ですか？」

那須「Hope for the best, and prepare for the worst」

那須「最善を期待し、最悪に備える。俺は医者として大切なことだと思っている」

町田「医者として大切なことですか？」

那須が町田を見て頷く。

那須「石原先生が今の治療を続けているのは、その先に、よりよい未来が待っていると信じているからだ」

一呼吸置く那須。

那須「町田先生、フミさんの治療方針を決めた時、頭の中で何を想像していた？」

町田「手術を受けたら助かる可能性はゼロではないけど……手術中に亡くなったり、合併症を起こして集中治療室で一生を終える可能性だってある。そうなればフミさんの思いに応えられない」

那須が頷きながら、町田の話を聞いている。

那須「患者が、百パーセント最善の未来を歩んでいく保証なんて、誰もできない」

那須「大事なのは、患者さんの最悪な未来がよぎった時、今やっている治療を続けることが、患者の思いに一致するか考えることだと思う」

那須「石原は集中治療管理を救急科に求めているそうだ」

町田「集中治療？」

町田が驚きの表情を浮かべている。

町田「相当な負担ですし、鈴木先生の思いが叶わなくなるかもしれません」

悔しそうな表情を浮かべている町田を那須が見ている。

○同・外科病棟個室

鈴木健（５２）の鼻に酸素カニューレが付いている。新しく胸腔ドレーンが左胸に挿入されている。中心静脈栄養剤の袋を見ながら、何かを計算している石原。

鈴木「石原、外科カンファレンスはどうだった？」

石原「併診の件は原口副部長が、八木部長に掛け合ってくれたみたいです。最終的な結論は合同カンファレンスで決まることに

なりました」

鈴木「そうか……」

石原「部長、集中治療管理となれば、ご負担をかけることになります。ただ主治医としてこの状況を乗り切るには必要と感じています、申し訳ありません」

鈴木に軽く会釈し、個室の入り口の扉の前に移動してドアノブに手をかける石原。鈴木が石原に声をかける。

鈴木「石原が初めて主治医をもった時、俺がかけた言葉覚えているか？」

数秒ほど考えている石原だが、申し訳なさそうな表情で鈴木を見る。

鈴木「主治医として一番難しいが大切にしてほしいこと、引き時の判断だ」

石原の表情が変わるが、再度鈴木の方を振り返り、軽く会釈して扉を開けて外に出ていく。

○同・集中治療室前　廊下

廊下で、八木と石原が話している。
資料を抱えた町田が歩いてやってくるが、二人の姿を見て足を止める。
八木「合同カンファレンスは、明後日昼に行うことになった」
石原「わかりました」
話していた八木と石原が町田の姿に気付き、ちらっと町田の方を見る。
石原「一つ確認なのですが、カンファレンスは院内の救急科と外科で行うで間違いないですよね？」
八木「そのつもりだ」
石原「ならよかったです」
石原が八木に軽く会者して去っていく。
石原が去ったのを確認して、八木の元へ歩み寄る町田。
町田「翔先輩、集中治療管理を救急科に求めているってちらっと聞きました」
八木「最終決定は、明後日の昼だ」
町田「そうですか……」

八木「石原くんも相当芯が強くて、大変だよ」

町田が抱えていた資料を八木に見せる。

八木「これは？」

町田「翔先輩も折れないはずですし、自分なりに探して見つけた、アイデアです」

町田の発言を聞きながら、資料を読み始める八木。

八木「町田……」

資料をある程度読み終えた八木が、町田の顔を見る。

町田「部長、よければ使ってください。残念ながら、僕は参加できないので……」

町田は八木に軽く会釈して、その場を去っていく。町田の後ろ姿をじっと見ている八木。

○同・部長室

八木が椅子に座って、机の上に置いてある車のフィギュアを持って眺めている。フィギュアを机の上に置き、何か

を決心した表情の八木。

○商店街・アーケード　レストラン前

村井正和（５０）がレストランから出てくる。村井のスマホに着信がなり、電話に出る村井。

村井「どうした？」

五十嵐隼人（２８）が店内から出てくる。何やら話し込んでいる村井の姿を見てレストランの横にある釣具ショップに移動する。

○商店街・アーケード　釣具屋

店頭で釣具を物色している五十嵐。

五十嵐の後ろに村井が現れる。

村井「五十嵐くん」

五十嵐「どうしました？」

村井「ちょっと頼みがある」

村井を見て不思議そうな表情を浮かべている五十嵐。

○居宅介護支援事業所・オフィス

通話中の青山（４０）が誤って書類の一部を床に落としてしまう。横を通っていた山﨑香織（５５）が拾い上げる。山﨑を見て軽く会釈する青山。書類が鈴木健のものだとわかり、内容を見始める山﨑だが、山﨑の表情が曇っていく。通話を終える青山。

青山「すいません、山﨑さん」

山﨑「鈴木さんって最後の場所はどこで過ごしたいって思っているの？」

青山「自宅ですが……」

もう一度書類を確認する山﨑。

山﨑「調整は進んでいるの？」

青山「まだ病院で治療中と伺っていますし……」

山﨑が呆れた顔で青山を見る。

山﨑「甘い、甘ちゃんだよ」

山﨑「この件、主任に頼んで私が引き継ぐわ」

青山が驚きの表情を浮かべている。

○村井訪問診療所・オフィス（朝）

村井がデスクに座っている。出勤してくる町田は自身のデスクの椅子に座る。正面に座っている金城恵（３６）。

金城「町田先生、院長が話しあるって」

町田「院長ですか？」

町田は腑に落ちない表情で、村井のデスクに向かう。

町田「院長、話があると伺って……」

村井は一枚の書類を町田に渡す。書類を見て驚きの表情を浮かべる町田。

村井「行きなさい」

町田「でも……」

村井「院長命令です」

村井が笑みを浮かべている。町田が後ろを振り返ると金城、五十嵐が町田の顔を見て頷いている。

○前田救命センター・経過ベッド

山田（２９）が心不全で搬送されてきた患者Ｂ（７０）にＮＰＰＶを装着している。高井が動脈圧ライン用の点滴バッグが下がっている点滴台を持ってくる。

高井「山田先生、用意しておいたわ」

山田「ありがとうございます」

山田が周囲を見渡す。医師Ａ（２６）は救急車受け入れの電話に対応中、初療室では島崎が清潔ガウンを着て何らかの処置を始めようとしている。

男（町田）が山田の前に現れる。

男（町田）「麻酔をします、少しチクっとしますね」

男は患者の左手首に局所麻酔の注射を行い、即座に動脈ラインを確保する。

山田が驚きの表情で男を見ている。

○同・初療室

患者Ｃ（６０）がベッドの上で寝ている。清潔ガウンに着替えた島崎が、患者Ｃの鼠径部から透析用カテーテルを入れようとしている。エコーを使って針先を描出しようとしているが難渋し、表情が曇る島崎。男（町田）がエコーの画面の横にきて、画面を調整する。視界に入った男の姿を見て、驚きの表情を浮かべる島崎。

島崎「町田先生」

島崎の目の前には、前田救命センターのスクラブを着た町田が立っている。

町田「島崎もうすこし左じゃないの？」

島崎が針先を少し左に変える。逆血を確認して安堵の表情を浮かべる島崎。

○同・ステーション前

清潔ガウンを脱いだ島崎、山田が白衣を羽織っている町田の元に、歩み寄ってくる。

島崎「どうして町田先生が？」

山田「確かに」

八木が歩いてやってくる。

八木「町田先生は、前田救命センターの救急医だ」

町田が羽織った白衣に付いてあるネームプレートには『前田救命センター救急科　非常勤医師　町田翼』と書かれている。町田が山田と島崎を見て、にっこり笑って頷く。町田が八木の方を見る。

町田「部長、何時からでしたっけ？」

八木「あと一時間後だ」

八木を見て頷く町田。

（回想はじめ　１４年前）○体育館・フロア

ランク戦が終わり、部員が引き上げている。町田翼（１８）、石原翔（２３）が横並びで座っている。

町田「翔先輩のスマッシュ早くて対応できま

せんでした」

石原「それが僕のプレイスタイルだからね」

町田「もしよければ、一セットだけお願いできませんか？」

石原「別にいいよ」

片付けをしていた鈴木舞（１８）に石原が声をかける。

石原「鈴木、申し訳ないけど一セットだけ得点をつけてくれないか？」

舞が石原、町田を見て頷く。

（回想終わり）

○同・会議室

長テーブルが複数並べられている。八木、鳥越（４８）、新井、島崎が入ってきて、部屋の左側のテーブルに並べられている椅子に腰掛ける。原口、亀井、橘も入ってきて、右側のテーブルに並べられている椅子に腰掛ける。

○同・会議室前　廊下

石原が廊下を歩いて会議室の方へ向かってくる。目の前から歩いてきて、会議室に入ろうとしている町田の姿に気付く。

石原「町田、合同カンファレンスは院内の医師で行う取り決めなんだ」

石原の後ろから、那須が歩いてやってくる。

那須「石原先生、町田先生はうちの医者だよ」

石原に一枚の紙を手渡す町田。石原が内容を確認すると、辞令となっていて、理事長の印鑑が押されている。石原は苦笑いの表情で町田の顔を見る。

町田「石原先生、よろしくお願いします」

石原と町田がお互いの目を数秒ほど見て、会議室へ入っていく。

○同・会議室

石原が右側のテーブルの真ん中の席に

座る。続いて町田が左側のテーブルの真ん中の席に座る。那須がドアを開ける。光浦が車椅子に座った鈴木を連れてくる。

那須「部長も同席していいよね？」

石原が鈴木の顔を見る。余裕そうな表情を浮かべる石原。

石原「もちろんです」

那須に促されて、左右のテーブルの間にある小さなテーブルの前に、車椅子の鈴木を移動する。那須が鈴木の隣に用意されていた椅子に腰掛ける。光浦が退出する。

那須「これから合同カンファレンスをはじめます。院長が出張中で不在なので私が取り仕切ります」

那須が石原の顔を見る。頷く石原。

石原「鈴木部長は、ステージⅣの膵癌末期で化学療法中です。現在腫瘍の影響と考えられる体液、栄養管理に難渋していて一般病

棟での厳密な管理が難しい状況にあります」

原口「先日、外科内でもカンファレンスを実施し、集中治療管理のために救急科に併診を依頼する運びとなりました」

八木「鈴木部長は、集中治療を受けると伺っていますが、お間違いはないですか？」

八木が鈴木の顔をみる。鈴木が八木の顔をみて頷く。鳥越が手元にあるデータを見ている。

鳥越「鈴木部長、正直このデータを見ると集中治療管理でも改善させるのは至難の技です」

八木「主治医をはじめ外科の先生方は鈴木部長に、回復の可能性をどの程度とお伝えていますか？」

石原「五パーセント弱とお伝えしています」

救急側の医師たちが驚きの表情を浮かべている。黙って話を聞いている町田。

島崎「五パーセント弱……」

新井「鈴木部長の前で申し訳ないですが、僕

らの侵襲的な治療で、管が繋がったままの生活になるかもしれないんですよ」

石原「新井先生、そんなのやってみないとわからないんじゃないの？」

橘「救急科はよく延命になるからといっているけど、この前の患者だってね……」

石原と顔を合わせる橘。

新井「それとこれとは……」

新井の表情が曇る。

若干の険悪な雰囲気を感じ取った那須が咳払いをする。

那須「救急科の町田先生は、何か意見はあるの？」

町田「新井の気持ちも、石原先生の気持ちもわかりますが……」

町田が鈴木の目を見る。

町田「鈴木先生の人生の生きがいってなんですか？」

鈴木が予期してなかった質問に一瞬驚いた表情を浮かべる。石原が半ば呆れ

た表情で町田を見ている。

鈴木「アウトドアだよ。欲を言えば家の近くで釣りをしたいかな」

町田「わかりました」

町田が鈴木を見てにっこり笑う。

石原「町田先生、何が言いたいの？」

町田「石原先生、集中治療室の患者は治療を受け続けながら、毎日筋力の二パーセントが落ちていくと言われています」

町田が石原の方を見る。

町田「鈴木先生に集中治療を続ければ、鈴木先生が抱く思いは、どこかで叶わなくなるかもしれません」

石原「回復して、集中治療室を出れる可能性もあるよね？」

町田「石原先生の言うとおりです」

石原が得意げな表情で町田を見ている。

町田「ただ百パーセント、それを保証できないですよね？」

町田が力強い表情で、石原を見る。

町田「だからこそ、やるなら期限付きで治療をすべきだと思います」

石原「期限付き？」

町田「集中治療における一つの手法、Time Limited Trial です」

八木が感心した表情で頷いている。

町田「回復の見通しが不透明な患者さんに対して期限付きで行う集中治療です」

町田「鈴木部長にはまだまだやりたいことがあります。期間内に治療効果が見込めれば続ければ良いし、見込めない場合は在宅調整をするべきだと思います」

石原が黙って町田の話を聞いている。

町田「ただ、前提として本人が集中治療を受ける覚悟がないといけません」

石原「それはさっきも言ったけど同意されて――」

那須「石原先生」

少し声を荒げた石原を制する那須。

町田が鈴木の目を見る。

町田「鈴木先生、正直にお答えいただきたいのですが……集中治療室でどれくらい頑張れそうですか？」

鈴木が町田の目を見ている。

＊＊＊

（フラッシュ）

町田「鈴木先生、最近気がかりなことって何かありますか？」

鈴木「家族との時間を長く過ごせるようにと思って治療をしている……。ただ効果がなく、このまま衰弱して寝たきりになるのなら今の治療を止めて、自宅へ退院したい」

＊＊＊

覚悟を決めた表情の鈴木。

鈴木「正直言うと……頑張れない」

鈴木「今日はこんなに集まってくれた中、本当に申し訳ない……」

カンファレンス出席者に向けて頭を下げる鈴木。

石原「部長、そんな……だってまだわからないじゃないですか？」

鈴木「もういいんだ。主治医のお前の気持ちはわかる。だが正直怖いんだ……自宅へ帰りたい」

石原が呆然とした表情で、鈴木を見ている。町田が石原の目を見る。

町田「石原先生」

町田「医療が患者の人生を決める可能性は無限大だと思います、でもどこかで患者の人生で医療を決めないといけない時がくる、その見極めを俺は医者として間違いたくないんです」

（回想はじめ　１４年前）○体育館・フロア

鈴木舞（１８）が得点板の紙をめくっていく。「２－６」とリードしていた石原のスコアだが、「６－６」となり、「８－６」と町田に逆転される。そのまま「１８－１２」から「２１－１２」

とスコアが変わり、町田側の得点板に一ゲームを取得したことを示す『1』の表記がされる。呆然としている石原翔（23）。

石原「どうして……」

町田「翔先輩は確かにスマッシュが早いので苦労しました。後半は、目が慣れてきたり、あえて打たせてミスを誘ったんです」

舞が二人のやりとりを見ている。

（回想終わり）

○前田救命センター・会議室

外科医や救急医が退出し、会議室には町田、石原、鈴木の三人がいる。光浦が開いている扉の前に立っている。

町田「石原先生、予定より早く合同カンファレンスが終わったので、まだ時間がありません」

町田が光浦を見て頷く。光浦が頷き、外に視線をやっている。

光浦「どうぞ、こちらです」

会議室に順に入ってくる舞、鈴木真由（５０）、山﨑、金城恵。

山﨑「鈴木さんのケアマネの山﨑よ。青山さんから変更になったの」

山﨑が名刺を石原に渡す。

金城「村井訪問診療所のアシスタントをしている金城と言います」

金城が名刺を石原に渡す。

石原「町田……」

石原が何かを察したような表情で町田を見る。町田が白衣に付いているネームプレートを外して、首から『村井訪問診療所　医師　町田翼』と書いてあるネームプレートを首から下げる。

町田「石原先生、退院前カンファレンスを始めませんか？」

○同・会議室前　廊下

山﨑と町田が立ち話をしている。

町田「すいません、急遽お呼びして」

山﨑「本当よ、先生。人使い荒いんだから」

町田が山﨑の方を見て、申し訳なさそうな表情で会釈する。

町田「あ、明日退院で本当に大丈夫ですか？」

町田が心配そうな表情で山﨑を見る。

山﨑「サービス調整で自宅の環境は終えているわ」

町田「さすがですね」

敬服した表情で山﨑を見る町田。

山﨑「普通よ」

いつも通り山﨑に尻を叩かれると思っていた町田だが、山﨑は町田の肩をポンっと叩いて去っていく。

町田の後ろから舞が歩いてやってくる。

舞「町田先生」

町田「鈴木」

舞「ありがとう、お父さんのために」

町田「俺の仕事はここからだよ」

町田が舞をみて頷く。

○鈴木宅・居間

鈴木が車椅子に座っている。五十嵐が血圧、酸素飽和度を測定している。鈴木の横に立っている町田。

金城「バイタル特に変わりないです」

町田が五十嵐を見て頷く。

町田「鈴木先生、今日お出かけしてみませんか？」

鈴木が驚いた表情で、町田を見ている。鈴木の目の前に、舞が釣竿三本を持って現れる。

舞「お父さん、すごい埃かぶっているけど……」

五十嵐が釣竿をチェックしている。

五十嵐「大丈夫です、使えそうです」

町田が五十嵐を見て頷く。

○河川敷・堤防

釣りを楽しんでいる町田、五十嵐、鈴

木の三人。鈴木の後ろには舞が立っており、適宜酸素ボンベのチェックをしている。鈴木の竿がヒットして、鈴木が魚を釣り上げる。笑顔を浮かべる鈴木。

町田「鈴木先生、すごいですね」

鈴木「たまたまだよ」

五十嵐「それに比べて僕らは……」

お互い釣果ゼロの町田と五十嵐は顔を見合わせて、うんざりした表情を浮かべている。

五十嵐「ちょっと休憩してきます」

立ち上がって車の方に向かっていく五十嵐。横並びの鈴木と町田。

鈴木「町田先生、以前僕の患者さんに挿管した時、ひどい言葉をかけてしまった。辛い思いもさせて申し訳なかった……」

鈴木が町田を申し訳なそうな表情で見ている。

町田「気にしないでください……」

しばらく考えている町田。

町田「でも、あの時に今の僕がいても挿管していると思います」

鈴木が町田の表情を見て、頷いている。

○鈴木宅・庭

真由と植物に水やりをしている鈴木。

鈴木と真由が顔を見合わせて、笑っている。二人の姿を陰から見守る舞。

○同・寝室

ベッドの上に鈴木が寝ている。鈴木の腕には皮下注射が繋がっている。鈴木に持続皮下注射のボタンを手渡す町田。

ボタンを受け取る鈴木。

○同・寝室（夜）

鈴木が、ホームビデオを観ている。ビデオには、大学入学式の看板の前で、笑顔の鈴木舞（１８）、真由（３６）

が立っている。ビデオを見ながらほほえむ鈴木。

○同・寝室（朝）

T「一週間後」

ベッドに寝ている鈴木の右手には持続皮下注射のボタンが握られている。安らかな表情で寝ている鈴木。町田が鈴木の死亡確認を行っている。ベッドの周りには舞、真由、金城が立っている。腕の時計を確認する町田。町田が舞の方を振り返る。

町田「九時十九分、ご臨終です」

頭を下げる町田。舞と真由は涙を流している。

舞「町田先生、ありがとう」

真由「本当にありがとうございました」

町田を見て頭を下げる舞と真由。

二人を優しい表情で見ている町田。

○前田救命センター・初療室

T「一ヶ月後」

初療室のベッドに患者D（75）が寝ている。医師Aがハイフローをつけている。初療室の入り口に立っている新井。横に現れる石原。

石原「すまん、遅くなった」

新井「呼吸不全で搬送されてきています」

石原が新井を見て頷き、患者Dの元へ歩み寄り、何かを話している。話が終わり、新井の元へ戻ってくる石原。

石原「新井先生、呼吸不全が進行した場合、挿管してくれないか？　患者さんと話して一週間は頑張ってみることにした」

新井「わかりました」

笑顔で石原を見る新井。

○同・外科外来

患者E（80）が椅子に座っている。

対面で座っている橘、島崎の二人。

橘「状態は横ばいですが、腫瘍の末期なのでいつ何が起こるか、わかりません」

島崎の方をちらりと見る橘。

橘「こちらにいる島崎先生は、救急科のお医者さんです。何か具合が悪くなって救急搬送された場合にお世話になる可能性があります」

島崎「救急科の島崎と言います。もしもの時のために、主治医の橘先生を交えて治療について話し合ってみませんか？」

島崎が『ＡＣＰ　人生会議』の冊子を患者Ｅに手渡す。

○岡田宅・寝室

岡田三郎（８０）が寝ている。右腕には点滴が取られており、抗生剤の点滴を開始する金城。村井が酸素流量の調整を終えて、立っている岡田明子（５０）の方を振り返る。明子が村井と金城の方を見て頭を下げている。

○有料老人ホーム花・居間

フミが笑顔でカラオケを歌っている。横にいる我那覇が笑顔でフミの様子を見ている。

○居宅介護支援事業所・オフィス

山﨑がデスクのパソコンで、ポテトチップスを頬張りながら、ケアプランの作成をしている。パソコンがフリーズした事に気付き、呆然とした表情の山﨑。

○安武宅・居間

安武（７０）、机を挟んで町田と五十嵐が向かい合って話し合っている。会話が一旦終わる。安武の目を見る町田。

町田「これからは、安武さんの人生で医療を決めないといけない時が必ずやってきます」

安武「俺の人生？」

町田「はい」

町田が笑顔で頷く。一呼吸おく町田。

町田「安武さんの生きがいってなんですか？」

（完）